
2人の転生者 ナルト s i d e

エミリア&志保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2人の転生者 ナルトside

【Zコード】

N2936M

【作者名】

ヒミリア&志保

【あらすじ】

ごく普通のありふれた2人の少年はある日突然死ぬことになった。そして、死後の展開は王道とも言ひべき転生・憑依。2人の紡ぐ物語は原作に近く、遠いもの。

果たして、原作キャラにチート系主人公である2人に敵う存在はいるのか？

最強系ご都合主義SSの開幕です。

プロローグ（前書き）

どうも〜。（^ー^）／
カメです。（笑）じゃなくて、志保です。（^○^）／
大変長らくお待たせしました。
では、プロローグをどうぞ！！

プロローグ

突然だが、俺は死んだ。……正確には“俺たち”だ。俺だけでなく、友人も一緒に死んだ。そして、俺たちは世間一般で幽霊と呼ばれる存在になつた。

ちなみに、幽霊になつた俺たちが現在何をしているかと言つと、スプラッターとなつた元・俺たちの身体を見下ろしている。

「これはひどいな～。吐けるものなら吐きたいけど、幽霊の俺らには叶わんか」

「その辺りはしょうがないから諦めた方がいいんじゃないかな？」

「なんこと、分かつとるつちゅうねん！」

取り敢えず、俺たちがこんなことになつた経緯を話さなければならないか……。あー……俺と友人は久し振りに会い、アニメイトやゲマズに行こうと話になつた。

そして、目的地に向かつて歩いていると、いきなり10セトラックが突つ込まれた。よくTVとかで自分の身に危険が及ぶと直前の動きがスローに見えると書つたが、これは事実だった。

何故、そう言い切れるかというと、トラックが突つ込んでくる瞬間をスローに感じたからだ。ちなみにトラックのドライバーは工口雑

誌を読みながら運転してた。

その結果、俺たちの身体は潰れたトマトみたいになつた。恐りく、ネギまに登場する近衛木乃香でも回復させられないだろ。う。

ちなみに、トラックの運転手は俺たちの死体を前にしてうろたえている。ふつ…、自分の愚かしさを悔いるがいい。…………さて、これからどうすればいいだろうか？

「セオリー的なもんを考えたら、死神や水先案内人が現れる所やな。俺は幽白のぼたん的キャラが現れることを期待する」

「何言つてんだ！！」こはBLEACH的死神が現れるのが良いに決まってるだろ！！特に夜一さんや碎蜂が現れたら最高だ！！」

「アホか！！これやから90年代後半から始まつたジャンプに毒された奴は……。話にならんわ！！」

「何だと…！」

俺たちが己の願望を全開にしたバカ議論をしてると、いつの間にか黒衣の外套を纏つた4、5歳位の幼女がいた。。

……今の俺の正直な気持ちを言おう。……殺してほしい。己が願望を前面に出した会話を幼女に聞かれるなんて、何という羞恥プレイだ。俺はそこまで堕ちた人間じやない。

俺が自己嫌悪に陥つてると、幼女は俺の服を引っ張りだした。……いや、俺だけでなく友人の服も引っ張つていた。……付いて来ていつて言いたいのだろうか？

その場で呆けたり罵り合つても意味ないので、俺たちは幼女に付いていくことにした。

ちなみに、幼女の頭には *F a t e / s t a y n i g h t* の真アサシンが付けている髑髏の仮面があった。新手のお洒落だろうか？そんなことを考えながらついて行くと、俺らは未確認生命体と遭遇した。

ボディビルダーの様なムキムキの体でポージングしている爺と会つた。しかも、軽く日焼けをしており、健康的な一面をあからさまにアピールしている。

余りに気持ち悪く、吐きたくても吐けない為、口に手を当ててうな垂れるしかなかつた。横目で友人を見ると、友人も余程気分悪くなつたためか、〇〇になつていた。その気持ちはよくわかる。さすがに俺も危うく現実逃避をしかけた。

俺たちのそんな状態を無視して、自分の筋肉を強調する様にポージングを変えながらクソ爺は話し始めた。

取り敢えず、クソ爺の行動を完全に無視だ。こいついう時、GSS美神の横島の煩惱補正が羨ましい。ちなみにクソ爺の話を要訳すると、こいつは神様のようで、更に俺たちは本来死ぬべき存在ではなかつたらしい。

そして結論を言つと、罪滅ぼしに現在の記憶を持つたまま、新しい人生を歩ませてくれるやつだ。まあ、所謂よくある転生話らしい。

「あ～…神さんや。俺らの転生する先つて、どこや？」

「NARUTOの世界じゃ」

つて、NARUTOかよ！……おいおい、俺の知ってる漫画で致死率ランクベスト5に入る世界だぞ。じつせなら、もつと平和な世界とか無いのか？

「ちなみに憑依寄りの転生で、お主はつらはサスケ。もう一人のお前はつづまきナルトになる」

「……おい。それは俺らに殺し合えって言つとるんか！？」

神を名乗るクソ爺っぽい未確認生物のキャスティングに思わず友人が叫んだ。ちなみに俺の中でこの未確認生物の評価は下がった。故にクソ爺から未確認生物に格下げだ。

「誰もそんなことは言ひとらんわ。原作ブレイクでも何でも好きにしたらよい」

なんか、やたらと上から目線の物言いで頭に来た俺は、ドスを効かした声で未確認生物に言った。

「……おい。俺達の平穏な人生をぶち壊した揚句、そんな危険極まりない世界に転生せるんだから、それ相応の見返りは与えてくれるんだろうな？」

「うむ。 お主らの希望する能力などを4つまで」「えよ」

クソ爺（笑）の言葉を聞き、これから事を考え、更なる質問をする。ちなみに未確認生物からクソ爺（笑）に格上げされたのは、俺の中での評価が少し上がったからだ。

「それは武器も含まれるのか？」

「当然じゃ」

「そうか、武器も可か…。まあ、当然だな。それぐらいなければやつてられないからな。俺、ナルトだしな。」

そんな事を考えていたら、友人が早速望みを言い出した。つーか、あいつこの先の事考えているのか？まあ、能天氣なやつだし、どうにかなるとも思つてはいるのかもしれないな（w）

「やつたら、まず俺の望みから言わせてくれ…」

「うむ。 言つてみい」

「まず、俺の開眼するであるうつ『写輪眼』に、『白眼』と空の境界に登場する『歪曲の魔眼』の能力を付けてくれ…！」

「ふむ…、分かった。ついでに生まれた時から『写輪眼』と『イザナギ』を使っても失明しない完全無欠な『万華鏡写輪眼』を使えるようにしてやるわ。で、あと2つの願いは何じや？」

「鋼の鍊金術師の鍊金術。できれば、真理達成バージョンと家庭教師ヒットマンREBORNの？死ぬ気の炎？を使える様にしてくれ」

「了解じゃ。ちなみに?死ぬ気の炎?7つの属性を全て使えるようにしてやる。ついでにボンゴレの超直感もな」

「また、無理な願いを言つたな。しかも、通つていいし。つて言つたか、あいつ…。さつき言つていたことと正反対なこと言つてやがる…」

「つて、お前の方が90年代後半以降から始まつたジャンプに毒されてるじゃねえか!!」

「五月蠅いわ!!リボーンは俺の正義ジャステイスなんじゃ、ボケ!!!!」

呆れて、気力が萎えた。

「…………もつ、何も言わねえ」

だが、これでかなり無理な願いも聞いてもらえたとわかつたのは好都合だな。フ、フフフ……。これで俺の望むことが叶えられたら、敵なしだな。

「俺の望みを言うがいいか?」

「つむ、言つてみい」

「では……。俺の望みは両儀式の『直死の魔眼』とギルガメッシュの『王の財宝』ゲート・オブ・バヒロン、幻海師範の『靈光波動拳』。あとは黒崎一護の第二段階の『虚化』。もちろん、角付きだ」

「お前!何で『靈光波動拳』やねん!?!?」

「…、五月蠅い奴だな。まあ、こいつの言つたことが切欠で思いついたんだがな…。これを得た時の特典をな…。」

「原点に戻ろうと思つただけだ」
「俺に対する嫌がらせやろ…！」

その後、俺と友人は言い争いをした。補足だが、クソ爺（笑）は中々に憎いことをしてくれたみたいだ。

全性質変化と原作5・2巻までに登場した忍術の知識、それを扱えるだけの才能を与えてくれた。ま、プチ六道仙人だな。そして、言い争いが終わると

「では、転生させるぞ？」

神がそう言ひ出した。すると、友人が何を思いついたのか、神に質問した。

「ちょい待つてくれ」
「何じや？」

「いや、白の性別を確認したくつてな。男なん？それとも女なん？」

また、妙なことを普通、男になつてゐるだろ？

「ふむ。今から行くお主達の世界は、正確には原作のNARUTOの並行世界じゃからな。白の性別は女となつておる。」

「マジか！？性別女つて、ま、まんまだな。違和感なしだな。（笑）つてか、横で何かニヤニヤしている友人がいる。」

「こいつ…、絶対にブレイク起こして“白は俺の嫁！”とかやりますと思つてゐるんだろうな。思い切り顔に出てゐる…。」

「ちなみに九尾の『尾獸』は植物を操作する能力があり、幽白の妖狐・蔵馬の様に魔界の食人植物を召喚することも可能だ」

「何！！よくやつた！クソ　いや、神と呼ばせてもらおうー！神！！！俺は初めて神を信じてもいいと思つたぞ！」

「では、もう聞きたいことも無さうじゃし、転生させるが

神がそう言つと同時に、俺と友人は強い光に飲み込まれた。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

なるべくHIMIリアと違つたオリジナリティを出したつもりですが……

これで私的に軌道に乗つたつもりなんで、これからはカメ速度ですが、今回より速く次を出せたらと思つてます。本当に……（汗）

相方のコメントヨコハマ

いや～、漸くの投稿です。

志保は執筆速度が亀なので次回更新がいつになるか見当がつきませんが、温かく見守つてくれると、私もうれしいです。
そして、私の方もこれから頑張つていきたいと思いますので、相方共々よろしくお願ひします。

第一話（前書き）

いつも、約2週間ぶりの更新です。

私はエミリア程執筆速度が速くないので、必然的に亀更新になります。

大体予想している更新速度は2、3週間置きです。

そんな亀更新でも見て頂けると幸いです。

第一話

ふむ……。どこの工口いトラック運転手のせいで天に召された俺は神のお陰で、ちゃんととうずまきナルトに転生できたようだ。

何故そういう切れるかというと、俺の視界に最初に入つて来たのが、三代目と御意見番と思しき3人の爺婆だつたからだ。

この時、いきなり3人の爺と婆が視界に入れたことで不愉快な思いをした俺は、思わず一番近い爺の顎に蹴りを入れてしまつた！！（笑）

……さて、時期的なものを考へると九尾事件が終わつて間もない頃だと判断できる。だから、友人はとっくに転生し終えているだろう。その内、サスケとも接触できるだろう。それまでは適当に過ごすか。ということは、ここからはサスケに会つまでの間の事をダイジェストで送ることにする。

まず、生後1ヶ月の俺。身体能力の確認をして、暴れ馬っぽいハイハイをしてみた。俺の背中に誰かが乗つていたらロデオの気分を味わえただろう。

ちなみに、爺は俺のハッスルっぷりにが驚いて間抜け面を晒していった。ま、ロデオハイハイをかます赤ん坊などこの世に存在する訳もないんで、当然と言えば当然だ。

生後半年の俺。両足で立ち上がる。爺が歓喜して泣いていた。ほほ

同時期に？チャクラ？を確認し、？チャクラ？による吸着の修行をした。周りの大人は俺を九尾として見てるので警戒していた。

1歳の俺。普通に話せるようになり、『呪靈錠』を着けてみた。
……マジで2度目の死を迎えるかと思った。

2歳の俺。？チャクラ？の制御を完全にマスターし、術の訓練を開始。『螺旋丸』などを習得した。

『王の財宝』^{ガート・オブ・バビロン}の能力と中身をある程度確認した。そして、最後に『内なる虚』を屈服と九尾を調教を始めた。

取り敢えず、自分の精神世界に行くことにした。ちなみに俺の精神世界は夜の草原だつた。精神世界での最初の行動は『内なる虚』の搜索だ。

……搜索を始めて3分後。『内なる虚』を発見した。小高い丘の上で昼寝をしてた。腹が立つた俺は『内なる虚』の鳩尾にエルボーをかました。

『内なる虚』は咽^{むせ}ながら起きると俺を一警し、再び寝転びやがつた。そして、俺が再びこいつの鳩尾にエルボーをきます。この遣り取りが5回程繰り返された。

最終的にまともな話し合いが可能となつたんだが、俺の『内なる虚』は面倒臭がりのようだ。俺が奴に“お前を屈服させる。故に戦え”と言つたら、“えへ、かつたるい”と即答された。

しかも、“力を貸して欲しいなら言つてくれれば、いつでも貸すよ。自分で使うのもかつたるいし”とまで言われ、あっさりと『虚化

の制御が可能となつた。

……『虚化』についてはラッキーだつたと思おう。次は九尾の調教だ。つと書いた訳で、今度は九尾が封じ込められてる牢屋を探そう。

『内なる虚』に案内を頼もうとしたが、“かつたるい”と即効で断られた。ただ、九尾がいるらしき方向は教えてくれた。更にその方向に向かえばサプライズがあると言われた。

サプライズ？ 一体なんだ？ 取り敢えず、俺は『内なる虚』が教えてくれた方向に向かうこととした。

あっ！ 言い忘れていたが、今の俺は16歳時のナルトの姿をしている。精神世界では自由に姿を変えれるようだ。

暫く歩くと信じられない物を発見した。保健所で犬や猫を入れて置く様な檻が草原のど真ん中にあつたのだ。

いや、それ以上に驚くべき光景があつた。檻の前で俺の親父・波風ミナトとお袋のうずまきクシナが優雅に茶を飲んでいたのだ。

その後の展開を説明しよう。両親と会話し、親父とお袋の精神体が俺の中に居座っていることが判明。しかも消えないらしい。

会話終了後、九尾とバトル。俺は精神世界で初の『虚化』をし、九尾に攻撃をした。以下の文章を元に戦闘を想像してくれ。

『虚弾』……、『虚化』したら普通に使えました。で、これにより九尾の？チャクラ？を制御下に置くと何故か知らんが『輪廻眼』を手に入れることができた。しかも、オンオフが可能だ。

もし、オンオフができなかつたら俺は絶望していただらう。だつて、『輪廻眼』つてカッコ悪いし。

ま、暫くの間は封印しておこう。何故なら俺は最初から5つの『性質変化』を使えるので、『輪廻眼』を使って得られるメリットが殆ど無いからだ。

精々、死体を操作できるくらいだらう……。こんな感じで2歳の頃の大きな出来事は終了した。

3歳の俺。『虚化』の保持時間を延長する修行と九尾の？チャクラ？をコントロールする修行を主にし、来るべきの時のために、七夜の業や両義の業を再現しようと修行した。

ちなみに、2歳時の『虚化』最高保持時間は1時間。現在の最高保持時間は7時間12分だつたりする。そして、俺の中の九尾が偶に生意気になるので再教育したりしている。

そつ言えば、俺が3歳ということはヒナタも3歳つてことになる。といつことは、ヒナタ誘拐事件が発生する年ということになる。

さて、ヒナタを守るためにも接触をしなければならないが、どうしたものか……。取り敢えず、公園にでも行つて考えることにするか。

公園に行くと、ガキどもが戯れていた。うるさいと考えがまとまらないので、手短な木に登り、太い枝に跨つて考え方を始めた。が、だんだんと睡魔が……。

俺が心地よく寝ていると、強い衝撃に襲われ、それと同時に目が覚めた。かなり頭が痛い……。俺の眠りを妨げるのは、いい度胸だ。フフ……、殺してやるうか。

「いつて――――――！ 誰だよ、一体！？」「アホ面のラーメン具材に鉄槌を加えたうちはサスケやけど、何か文句あるんか？」

そんな声をかけられた。目の前には

「……？ お前……」

サスケがいた。

「おう。久し振りやな、ナルト」

「……ああ。久し振り、サスケ」

偶然とはいえ、サスケと接触できた。正に怪我の功名。そして、ヒナタと接触することもできた。サスケ……、グッジョブ！

その後、3人で蹴鞠なんかの子供の遊びをして、周りが暗くなり始めるとなし俺とサスケでヒナタを家まで送った。

そして、サスケの家に着くまでの間に俺とサスケはこれまでやつてきた修行の内容を話した。

色々と話していたらサスケが聞いてきた。大方リボーンに登場する道具が収められているか、という話だろう、と予想する。

すると、見事に予想が的中した。そして、リングをくれとせがまれた。俺には使えない代物なんで渡したら、サスケは狂喜乱舞した。

サスケとの再会から2カ月。雲隠れの里との間で同盟条約が結ばれた。近々、ヒナタ誘拐未遂事件が発生する筈だから、警戒しないとな。そして、雲との同盟から数日後。誘拐未遂事件は起こった。

俺とサスケは昼間はヒナタと遊びつつ周辺を警戒し、夜は日向宗家の邸宅を交代で警護することにした。

雲が動いたら『口寄せの術』でいない方を呼び出すことになっていたんだが、誘拐当日に俺は口寄せで呼び出された。

「ナルト。目標は北に向かつてる」

背中におぶさつてきたサスケがそう言い、それを聞いた俺は『ソーダ 韻転』を使ってその場から移動した。

ちなみに俺は『虚化』の制御訓練をしている内に、『虚閃』なんかも使える様になつた。

いつもして簡単に先回りした俺たちは、忍頭がやつて来るのを待つた。そして

「！？ 何者だ！？」

忍頭がやつて來た。しかも、俺たちに氣付いて叫んだ。極秘任務のくせに、大声を出すとはバカか？

「……何だ、ガキか。悪いが、見られた以上死んでもらひ」

忍頭はヒナタを抱えたまま忍刀を手にして襲い掛かつて來た。まあ、『ソード・響転』を使える俺には激遅の攻撃だ。

『写輪眼』を使えるサスケにとつても激遅の攻撃だらう。オタツキ一なサスケに言わせるなら正に“スロー過ぎて欠伸が出るぜ”状態だらう。

襲い掛かつてくる忍頭に対して俺はフインガースナップで音を鳴らした。すると、俺の指定した空間が歪み、その歪みから鎖が射出され、忍頭は鎖で雁字搦にした。

この時、忍頭はヒナタを手放してしまつていた。頭から地面に落下しそうになつたヒナタを、俺は一瞬で助け、お姫様抱っこでキヤツ

チしてやつた。

ちなみに、忍頭を雁字搦めにしとる鎖は『天の鎖』だな。必死に抜け出そうとしているが。まあ、そんなことをせる訳がないはずだろう。（笑）

「墮ちろ…。そして、巡れ」

サスケが『写輪眼』によつて幻術を掛けた。忍頭をあつさりと氣絶し、失禁した上に泡を吹いている。これで本当に忍頭なのだろうか？そんなことを考えながら、俺は『天の鎖』^{エルキドウ}を解除した。そして、サスケが忍頭を縄でふん縛つた。

忍頭を縛り終えた頃合いにヒアシが現れ、事情を説明した。なんだかんだで、俺とサスケは日向の屋敷に行くこととなり、火影の爺に説明することになった。

そして、雲の忍頭を生け捕りにした褒賞として、一度だけできる範囲内の願いを叶えて貰えることになった。

俺はこの貸しを何に使うかはあらかた決めてはいる。だが、使わなぐても達成できそつだがな。（笑）さて、どうするか…。

その後、サスケが『呪靈錠』を付けてくれというから付けてやつた。

「おい、ナルト！ハンデとして今から2年間は『呪靈錠』を解除し

「とけーー！」

と、サスケが言つてきたが

「だが、断るーー！」

「このうずまきナルトが最も好きなことの1つは、『Yes』と答えると思つている奴に“NO”と断つてやることだーー！」

「くつ！確かに岸辺露伴は俺らの正義……。だが、お前に使われるためつちやムカつくーー！」

こんなアホな会話があつたことを伝えておこう。

4歳の俺。取り敢えず、植物操作の修行をした。あと、サスケに匣兵器と『メグローブ』、『時雨金時』、『死ぬ氣丸』とかをやつた。

5歳の俺。サスケに誕生日プレゼントとして『龍神剣』をやつた。そしたら、サスケがヒナタとのフラグを立て易い様に2人つきりになれる様に気を利かせる様にしてくれた。グッジョブーー！

他にはヒナタに妹が生まれた。ハナビだ。そして、何故か、サスケに妹が生まれた。名前はミカゲというらしい。何故かサスケがシンコンになつていた。もしゃと思つてはいたが、やはり

6歳の俺。サスケとヒナタがアカデミーに入学する時期が来た。ちなみに今の俺は学年が上だ。ま、ワザと卒業試験に落ちて合流する予定だがな。この後、サスケと2人で訓練をする予定だ。

そして、俺はサスケと演習場で訓練を始める。今日は転生して初めて『魔眼』を使う。サスケもそうみたいだ。フフフ…、ハハハ！！ついに、ついにこの時が来た！！

「取り敢えず、初使用やから木とか岩に向かつて使おうか？」

「そうだな」

そう言い終えると俺たちは互いに近くにある木や岩の方を向いて、眼に力を集中させた。すると、何故か俺の視界に映る木が歪み始めた。

何だ、これ？と思つたとき、サスケの叫びが聞こえた。しかも、リアルジブリ。

「め、眼が！メガア————！」

と、聞こえた瞬間、俺の腕に激痛が走った。

「ギヤア————！、腕が！腕がもげる————！」

と、思わず叫ぶほど、マジで痛い…。つーか、俺たちの身に何が起つた！？

第一話（後書き）

いかがでしたか？

これでナルトのチートっぷりの片鱗が見えましたでしょうか？（笑）
まあ、サスケsildeを呼んでいた方なら、知つていらつしゃるで
しょ？が…

そんな方々にはチートになる過程を楽しんでいただけたらと（笑）

では、志保でした。（^○^）／

追伸

今回登場した

「『虚弾』、『虚弾』、『虚弾』、『虚弾』、『虚弾』、『虚弾』、
『虚弾』、『虚弾』、『虚弾』、『虚弾』、『虚弾』、『虚弾』、『虚弾』」

はジョジョのオラオラ&無駄無駄&アラアラッシュがモデルです。
(笑)

第一話（前書き）

えへ、長ーーーとお待たせして申し訳ありません。

私は社会人のため、仕事に追われ更新できませんでした。

それでも読んで下さるなら、幸いです。では、どうぞ。

By志保

痛ツーーーと声にならない声を上げそうになつた。ありえんほどに腕に激痛が走つた。具体的に言つと腕をもがれた痛みだ。泣きそうだ。

サスケの方を見てみると血の涙を流していた。はつきり言つて引いたぞ。

この事態をサスケと解析してみたら、なんと『魔眼』が逆になつた上にリスク付きという事実が判明した。俺達の反応はどうと…。

「今度会つたら、確実に殺す！！

「あんのクソ神がーーーーー！」

という感じだ。要するにあの爺は晴れて俺達のブラックリスト入りというわけだ。

取り敢えず、サスケと話しあつた結果、廃人にならない様に『魔眼』を使用するという結論に至つた。なので早速、『魔眼』の使用持続時間を延ばす為の特訓をやることにした。

そして、忍者学校の上期が終了し、長期休暇に入つてある程度経つた頃。うちの居住区でサスケが一騒動起こしたって情報が入つて来た。

そつと言えば、この間会つた時につけば一族の動きが怪しくなつてき
たつてイライラしながら言つてたな。

そして、それから更に時が経ち、ある日の晩にサスケが家に来てい
きなり土下座をした。

一瞬、何なのが分からなかつたがサスケの話を聞いてようやく理解
した。簡潔に言うなら、サスケが旅に出ている間、ミカゲを保護し
て欲しいとのことだ。

俺はサスケの頼みを了承し、ついでに『王の財宝』^{ゲート・オブ・バビロン}から魔道具を6
つ、錢別として渡した。

サスケが旅立つて数日後、俺は日向家に世話をすることにした。ヒ
アシさんはあの事件後から、妙に俺を気に入つたらしく、一いつ返事
で快く承諾してくれた。

日向家に住むことになつた晩、なぜか盛大な宴会が開かれた。その
時、酔つ払つたヒアシさんが俺に

「ナルト君。なんならヒナタの許嫁にならないかね？」

と言つてきた。ヒナタも嫌じやなかつたみたいで、俺も満更でもな
かつたので承諾。その日の宴会は急遽、俺とヒナタの婚約パーティ
の許嫁▼e▼みみたいなものになつた。

ここからが日向家で送つた日常の描写の一部を送る。

「ところで、ネジよ。なぜ、俺をナルト様と呼ぶ？」

「それは、ナルト様がヒナタ様の許嫁だからです」

「それはそうだが…。俺は年の変わらないお前にそう呼ばれたくな
いと言わなかつたか？」

「そう言われましても、私はナルト様を尊敬しておりますし、故に
ヒナタ様に相応しい方だと確信しておりますので、なんと言われま
しても変えるつもりはございません」

「なら、俺はこれからお前をネジ様と呼ぶがいいか？」

「それはなりません！」

「なら、やめん」

「……仕方ありません。なら、ナルトさんと呼びます。これ以上は
なんと言われようとも譲りませんからー。これで駄目なら、ナルト様
にします！」

「…仕方ない。それで妥協案にするか」

この時、ここで妥協してなければ死ぬまで様付けされていた様な気
がする。

次は日向家の修行風景（『呪靈錠』＆『呪靈錠・裏式』、ヒナタ
編）を送る。

取り敢えず、俺とヒナタが修行する場所は森が多いことを先に言つ
ておこう。屋内戦闘もあることはあるが、忍は基本的に屋外戦が多
いからな。

「で、ヒナタよ。今から君にあるものをかけるのだが、その説明

をしてもかまわないか?」

「で、つて?」

「気にするな」

「うん。それをかけたら、ナルト君みたいに強くなれる?」

「なれるさ。ヒナタなら」

と、俺は太鼓判を押してやつた。ま、正直ヒナタは原作の性格をどうにかすれば、才能は秀逸だから確実に強くなれるしな。だから、まず、自信を付けさせるようにしなければな。

「なら、付けるー。」

「じゃあ、先に簡単に説明するぞ。今からかけてやる『呪靈錠』と『呪靈錠・裏式』というのは、?チャクラ?と身体能力に負荷をかけて強化するものだ。

その負荷が非常に強力な呪法のことで、危険もそれなりに大きいがやるか?」

その言葉にちょっと怯んだヒナタだったが、何か思うところがあるのか改めて決意を宿した瞳で俺を見て言った。

「それでも、私はやりたい。ナルト君を支えられるようになりたいから。」

「グハッ!...まさか、ヒナタがこんな(萌え的な)精神攻撃を使つてくるとは.....。予想外だが素晴らしい.....さて、気を取り直し

て

「わかつた。全力でサポートするから、安心して修練してくれ」

この時、俺は多分顔を相当紅潮させてただろう。あつ！結果だけ報告するとヒナタは無事『呪霊錠』に耐えた。

次は日向家での修行風景（『呪霊錠』＆『呪霊錠・裏式』、ネジ編）を送る。

ヒナタに『呪霊錠』をつけて数日後。俺がヒナタに修行をつけてることを知ったネジが自分もと言つて来た。

まあ、宗家のこと恨んでないし、純粹に宗家の役に立ちたくての志願やから俺は一いつ返事で了承した。

で、ネジにも実戦式組み手や動きの最適化を指導してやり、ついでに、『呪霊錠』もかけてやつた。ネジは七日かかった。ちなみにヒナタは5日だった。

やはり、女性の方が痛みに強いと聞くから、その特性のせいだろうか？今日ほど男と女の神秘に唸つたことは無い。

次は俺の修行風景の描写の一部を送る。

俺は郊外の森に来ていた。理由は俺個人の修行をするためだ。やはり、人のいない場所でないと危ないからな。主に、他人が…。

ふむ、手始めに七夜の業をやってみるか。そこらの大木に向かって
俺は

「蹴り穿つ！」

と『閃走・六鬼』を放つた。すると、轟音と共に大木の幹に穴が開き、そこから折れて倒れていった。

ふむ、十分な威力だな。しかし、穴が開くとはさすが七夜だ。人間に放つたらかなりエグイことになるな。まあ、一般人には放たんが…。

よし、次はゾロの技でもやつてみるか。そう思った俺は火影の爺さんに強請つて買って貰つた3本のチャクラ刀を抜いた。そして

「三刀流『鬼斬り』！！」

俺は岩に向かつて技を放つた。すると、岩は6等分になつた。よし！と俺は満足した。だんだん、俺はテンションが上がってきた。次は大岩に向かつて技を放つ。

「無明神風流『奥義・朱雀』！！」

すると、大岩は轟音を鳴らして粉々に砕け散つた。よし、テンショ

ン急上昇ーーー！が、爺さんから貰つたチャクラ刀が砕けた。どうやら

どうやら、チャクラ刀が『朱雀』を放つ時の勢い？に耐えられなかつた様だ。それなりの業物つて話だつたから罪悪感が襲つてくるなー。テンションが少し落ちる。

よしーー！テンションを上げる為に『宝具』を使おうーー俺は『王の財宝』^{ピロン}を開き、紅い槍を取り出す。

そして、その場から一気に助走し、跳躍。そして

「『^{ゲイボルク}突き穿つ死翔の槍』ーー！」

真名解放をした。すると、着弾点にクレーターができた。（笑）うおーーー！何だかミナギツテキターーーー！（笑）

次はアレだーー！俺は『王の財宝』^{ゲート・オブ・パリロ}から『』と某『』兵が使用していた例のブツを取り出した。そして

「『^{カラドボルク？}偽・螺旋剣』ーー！」

空に向かつて真名解放をした。すると、帰つてこなくなつた。……どうすればいい？……どうすれば……はつーー呼んでみるか。

「帰つて来い！」

俺が叫んだら空の彼方から帰ってきた。アレには『筋斗雲』と同じ様な特性もあるのか？そんなことを思つていると『偽・螺旋剣』は勢いを殺さずにつっさに向かつてきた。

ヤバイ！と思つた時には既に目前に迫つていていた。俺は慌てて手を前にかざし、前面に『王の財宝』から取り出した『宝具』を展開する。

「『熾天覆^{ロード・アイアス}う七つの円環』……」

真名解放をして防ぐ。ふうーー、マジで死ぬかと思った。洒落にならん。自分で放つた攻撃で死ぬとか。

つーか、アイアスの花をガリガリ削つてるんですが、これはまだ絶贊^ピンチ中か？と冷や汗が出た。

ど、どうすれば、止まるんだ？このままではいくら？チャクラ？を送り込んでアイアスを強化しても突破されるのも時間の問題だぞ？……ん？チャクラ？そうか！！『偽・螺旋剣^{カラードボルク？}』に送つてているチャクラを止めればいいんだ。パニックつて思いつかなかつたわ。

暫くして、カラドは止まつた。こいつは某弓兵の切り札だけあって、突破力の威力は凶悪だな。使いどころを見定めなければヤバイな……。

他にも、試したかったが、ヤバそ�なで止めとくか。と言つか、周りの森が荒野になつてゐる。どうじよつ……。

そうだ！九尾の植物操作の能力で再生させるか。なら、すぐさま、実行、実行つと。

「と、こんな感じでいいかな？」

と周りを見渡してみると……さつきまでの普通の森が、いつの間にやら魔の樹海になつてしまつた。

「しまつた。この能力の便利さにテンションが上がって調子に乗つてしまつた。」

ま、これはこれでいいか。どうせ人里離れた所だし。うん、後悔も反省もしていない。ほ、本当だぞ？こうして、俺の修行のある一日が終わつた。

後日、その樹海は富士の樹海の如く噂が立つてゐた。そして、いつしかその不気味さから『物の怪の樹海』と名付けられた。

……ま、見た目がもののけ姫に出てきたり森になつちまつたから、当たらずとも遠からずだな。

第一回一日向家で送つた日常の描写の一部を送る。

ある日、修行を終えて田向家に帰る途中での出来事だ。

「待てー・つずまきナルトーーー！」

俺は後ろから急に呼び止められた。振り向くとそこにはその他大勢の男達が立っていた。

「なんだ？お前達は？」

と詰つと、代表者らしき奴が一步前に出て、口を開いた。

「我らは田向ヒナタ様を愛する“ハグして、ハグして、ヒナタ隊”！略して、H・H・H隊だーー！」

と言ひやがつた。成程、こいつらは変態と言ひ知の紳士なんだな。見た目が明らかに十代後半だし……。つてか、どこのヒナタ隊ーEーだよ。

あつーSHUFFLEーーーと言えば、俺にはトラウマがあるんだよな。読者にもトラウマを持つてるのがいるかもしれない。あの空鍋。いやー、あの眼のハイライトが消えた楓が空の鍋でお玉をかき回

してゐるシーンは壮絶だつた。

「誅が降るぞ！！」

誅が降るぞ！！

おつと！俺がどうでもいいことを考えている間も代表者が言葉を続けていたようだ。

「スマン。途中から聞いてなかつた。もう一度言つてくれ」「何！？まあ、いいだろう。」「ホン！うづまきナルトに忠告する！ただちにヒナタ様との許婚の関係を破棄しろ！でなければ、天誅が降るぞ！！」

何を言つてゐるんだ、じつらつてか

「明らかに人誅だろ？」

と言つてやつたがそれも無視して、変態といつ名の紳士
変態でいいか。変態共は、自分達がどれほど想つて いるかなどのた
まい始めやがつた。挙句には

「よつて、ヒナタ様は我らのモノだ！！」

最期に代表者がそう言つて終了した。女性をモノ扱いするセリフ。それを聞いた瞬間、俺はキレた。

「――」

この日、この通りに狂戦士^{バーサーカー}が現れるという都市伝説の様なものが生まれた。

ちなみに俺はそんな者には出会つておらず、何故か手を真っ赤な何かに染めて、頬にはケチャップ的なもの付けていた。そして

「いい仕事をした」

と独り言を呴き、腕で汗を拭つた。ちなみに変態集団はこの日の内に壊滅。最後の台詞が

「我らを潰しても、第一、第三の我らが必ず天誅を降す!」

どこの魔王だよ…。ってか、その台詞は死亡フラグだ。

第一話（後書き）

こんばんは、志保です。

とこつわけで、一話でした。

最後のは、明らかにネタに走りたくて書いてみましたw

そして、今回読んで下さった皆様ありがとうございました。

今回はデータが吹き飛ぶし、仕事が忙しくなるし、と散々でした。

仕事も安定期的なものに入ったので、今回みたいに次回は遅くならないと思います。

それでも、私の執筆速度は亀なので、早く更新は出来ないですが、一応、今月末ぐらいまではもう一話更新しようと思っています。

こんな私の作品をこれからも読んで頂けるなら嬉しいです。

第三話（前書き）

えへ、予定より遅れて申し訳ありません。ようやく完成しました。
難産でした…。

とこりわけで、じいちゃん。

ある日、どこかの馬鹿サスケがうちはの虐殺の後に妹を保護してくれとか
言つて里を出て行つた。恐らく、旅の目的は嫁探しだらう。

そんなバカが気ままに旅をしていた頃、俺はとくに長期休暇が終了したことで忍者学校に登校していた。

しかも、思い付きで憧れでもある原作のナルトが対ペイン戦で羽織ついていたダンダラ模様の羽織を自作して、それを羽織つて登校した。俺の格好を見た同級生や先生が驚いていた。先生側の驚き恐らく俺の姿が四代目と重なつたからだらう。元々、容姿は親父似だから尚更か。

同級生が驚いたのは羽織に書いてある文字のせいだらう。なんせ、書いてある文字は“天上天下唯我独尊”だもんな。

ま、俺の人生のスローガン的に考えて書いたわけだが……。他者から見れば驚きだらう。そんな訳で他者に少々驚きを「えながら長期休暇明けの登校をしたわけだ。

…… そういえば、卒業試験はいつ頃やるんだろうか? 取り敢えず、俺はヒナタと同期になる為にワザと卒業試験を落第しようと思つている。

原作合わせといつ意味合いを兼ねてな。そんな感じでのらりくらりとぬらりひょんの様に生活していると、ついに1回田の卒業試験がやってきた。

当然、俺は態と卒業課題を失敗した。原作ナルトが中忍試験本戦で言つてたが、卒業試験は『分身の術』だつた。

多分、次の卒業試験も『分身の術』だろつ。次回も同じ感じで落ちるつもりなんで、その描写は割愛させて頂き、今回は原作開始までの出来事を話そつと思つ。

まず、俺は授業そつちのけで、自分の修行を主にしていた。例えば、『虚化』の維持時間向上とか、新技の開発とか、九尾の能力のコントロール制御とか、体術の動きの最適化とかをしていた。

取り敢えず、『虚化』は、『虚閃』のバリエーションである『王虚の閃光』とか『黒虚閃』を試してみた。

いや～、普通に空間が歪んだね。空間に影響を与える攻撃ということを考えると『乖離剣』の『天地乖離す開闢の星』といい勝負がもな。

ちなみに『王虚の閃光』や『黒虚閃』を使ったのは木ノ葉の里から少し離れた火の国の森だったんだが、使用時の空間の歪みが里からも観測できた様で俺が去った後に暗部が俺のいた場所に調査に行つてた様だ。

里に戻ると何故か都市伝説っぽいのになつていて、里の爺さん婆さんが“天変地異の前触れじゃーー！”とか言いながら、歪みが観測

された方角に祈祷をしてた。

そういうば、うちはマダラの攻撃無効化能力も空間そのものに影響を与える『王虚の閃光』や『天地乖離す開闢の星』には意味が無いかもな。

諸悪の根源たるつちはマダラに会うのは第一期からだから確認のしようがないが、会った時には試してみよう。

他に修得した技といえば、るろに剣心に登場する新撰組三番隊組長・斎藤一の必殺技、『牙突』か? 突きの勢いと突進力の相乗効果で拳大の石を粉々にできる。

あとは戦国BASARAの伊達政宗の六爪流を修得した。無論、性質変化を使って『HELL DORAGON』を使える。

ちなみに初めて『HELL DORAGON』を使った時、その力に耐え切れずについた刀が全て砕け散った。

他に修得したのは、とあるの科学の超電磁砲の御坂美琴の必殺技である『超電磁砲』だな。一度、やつてみたかたんだよな。

が、いざ修行をしようとしたら問題が発生した。この世界の通貨は紙幣なんでコインが無い。と、いう訳で忍具店にオーダーメイドでコインを作らせた。

ギャンブルの街である短冊街なんかに行けば、スロットルのコインとかがあるが距離も伸びないし、威力も低く、硬貨も燃え尽きてしまった。

ちなみに特注品「コイン」の費用は自分持ち。一応、非公式とはいえた。親父は四代目火影だったこともあり、親父だけでなくお袋も死んでいるので、莫大な両親の遺産がある。

特注「コイン」を使っての『超電磁砲』^{レールガン}は飛距離も威力も段違いに上がった。具体的に言つたら飛距離は御坂美琴の倍、威力に至つては1.5倍だ。そんな感じで修行の日々を過ごしていた。

勿論、修行だけでなくヒナタとの仲を深めるためにデートに誘つたりもした。そのお陰でちょっとしたグルメになつた。

そして、馬鹿^{サスケ}が旅に出て3年程経つたある日、ハナビが俺に修行をつけて欲しいと頼んできた。

最初は、まだ幼いハナビに修行をつけるのは嫌だったので断つたのだが、あまりにもしつこく頼んできており、ついには

「何故、ヒナタ姉様は良くて私はダメですか？」

と涙を溜めて訴えて来るので修行をつけてやることにしたのだった。まあ、要するに泣き落としに負けたんだけどな。子供で女で泣き落としは卑怯だよな。……ハア～。

ハナビの修行は戦闘慣れをする為に主に組み手をしてやつた。そして、例によつてハナビにも『呪靈錠』をかけることになつた。

この経緯については察してくれると助かる。言つておくが、ハナビに『呪靈錠』をかけたのはある程度修行して基礎が身に着いてから

だけどな。

といふか、この姉妹化け物だ。ヒナタは三日で修得してしまつし、ハナビに至つては一日で修得した。俺でも五日掛かつたのに……。チートなのに……、自信無くしそうだ……。

因みにハナビは俺のことを“ナルトさん”と呼ぶ。どうせなり“ナルト兄様”と呼んで欲しい。将来的にはヒナタと結婚して本当の義兄さんになるんだから。

が、ハナビは俺の内心を知つてか知らずか、例の泣き落としの姿の可愛さに萌 ^し、ゴホンッ！いや、当たられてついつい屈してしまつた。

最近は味を占めたのかその技を使用して多々頼み^しとをするようになつてしまつた。更にヒナタにも教えた様で、ヒナタも使用し始めた。

初めてヒナタに使用された時、俺は“一体なんの精神攻撃だ！”と思った。その可愛らしさ、愛らしさたるや、俺のライフを一気に追い込むほどのダメージを『覚めるほど』だ。

最初の時など、危うく昇天しかけた。ぶつちやけ、“もう止めてくれ！俺のライフはもうゼロだ！！”と俺の中の天使が叫んだほどだ。

だが、やはり“可愛いは正義！”だな。あれに男どもは騙されてもついつい許してしまつのだらうなあ。俺もだが……。（笑）

まあ、そんなこんなで姉妹に修行をつけることになつた。

ハナビの修行を初めて暫く経つたある日、今度はミカゲが俺に修行をつけて欲しいと頼んできた。情報源は言ひまでもなくハナビだろうな。

ミカゲの思惑は手に取るようわかるぞ。どうせ、あの親友のためだろうな。一応、何故強くなりたいのか確認を取つてみると、案の定

「サスケ兄様が帰つて来た時に驚かせたくて…。それとサスケ兄様を支えたいから」

と赤くなりながら、惚気てたぞ。クソッ、こんな健気な妹を置き去りにして、明らかに嫁探しに行きやがつて、シネッ！シスコン！

こつなつたら、油断してたらあいつでも危ないほど鍛えといでやう。それがせめてもの意趣返しだ。

ちなみにうちはの事件はサスケが旅に出た約1年後に起つた。ミカゲの家は長男が事件を起こして逃亡、次男が放浪中、両親は事件で死亡。事件発生直後はある意味天涯孤独の状態だ。

しかも、その時のミカゲの年齢は1歳。1人で生きることなどできる訳もなく、バカの頼みでもあつたのでヒアシのおっちゃんに頼んで日向家で保護して貰つた。

さて、話は変わるが俺の許嫁のヒナタは結構嫉妬深いみたいだ。何故なら俺がそれなりに綺麗な女性に目をやるだけで、腕を抓るか足

を踏むかしてくる。

極めつけは、一時期同期で結構仲が良かつたテンテンとヒナタがない時に話した後、ヒナタに会った時はヤバかつた……。いきなり

「なると君カラ、他ノ女ノ人ノ匂イガスル…。ネエ、なると君? 私ガイナイ間ニ誰ト会ツテタノカナ? カナ?」

と、顔は笑顔だけど、目が全然笑ってない表情を向けてくるものだから。なまじに顔も整っているせいか迫力があり、すごい威圧感をプレッシャーを出してたので、じつちは冷や汗ダラダラと流しながら

「ヒ、ヒナタ落ち着いづ。といづか、俺の話を聞いてくれ!…だから、柔拳の構えはやめろ!…!」

「ハナシ?」

「おう。今日はただクラスメイトの友達のテンテンにあつてただけだつて!」

「フーン? ソノ割ニハ名前ヲ呼ビ捨テニサレルホド、仲イインダ?」

「いやいや、ホントただの級友だから!…」

と、俺は必死に説得したが

「フーン、ソンナなると君ハアツチテ〇HANASHIシヨウカ?」

と、俺の襟首掴んで引っ張られる。つーか、ヒナタ曰がハイライトになってる上、言葉遣いが片仮名になってるぞ！しかも、俺の名前は平仮名になってるし！！

その後、ボディーに掌底を繰り出され、気絶させられたかと思つて地下室っぽい所に監禁され……、その後は恐ろしくて思い出したくも無い。

そして、ウザイのがうちはアキトだ。何かとミカゲを狙つて襲撃してくれるし、その邪魔を毎回俺がしているせいか、最近俺を目の敵にしてきた。マジでウザい！…こいつら、眼中にないのに。例えば

「卒業試験落ちたドベ野郎が邪魔すんじゃねえよ」

と、こんな風に名前すら呼ばない失礼さ。つてか、何故にドベ？取り敢えず、イラついたこともあって言い返すことにした。

「そのドベに毎回邪魔されるお前は何なんだろ？な？」

「フン！俺がドベ相手に本気になるなんて大人気ないことをできる訳が無いだろ？！」

いやいや、お前は子供だから。つてか、5歳も年下の女の子を狙うお前は十分に大人気ない。まず、そのことに気付こうな。

つてか、マジでいい加減面倒だしウザくなってきた。…消そつかな？けど、処理とかが面倒だ。仕方がない。今度から奴は適当にあしらひ」とこじよつ。

そんなこんなで、あつという間に火影の爺さんと約束してた旅の期間が終了したようで、**馬鹿**^{サスケ}が帰ってきた。しかも、女を3人も連れて……。

やはり、嫁探しだったか。……そう言えば、サスケはチャクラ刀の刀匠になつてたな。よし、後でねだりにいこう。もしくは、物々交換で造つてもらつか。

お、アイツ俺を見てなんか驚いているな。恐らく俺が羽織つてる羽織が原因だろう。ヒナタの方を見て驚いているな。まあ、これはヒナタが原作一期の服装で、更に髪型がロングだからだろうな。

つと、そんなことを考えてる内に話が進んでたみたいだ。どうやらサスケは同期の男子を全て敵に回したみたいだな。女子も汚物を見る様な視線だ。

お、ヒナタがサスケに汚物を見る様な視線を送つてたかと思うと、今度はサスケ嫁・^sに羨む様な眼差しを向けてる。何故だ？

そう思つていると、今度は俺に視線を向けていた。しかも、例の涙目の上目使いだ。目は口ほどにモノを言つをこれ程までに体現してるのはいないだろう。

ちなみにヒナタの目が語つてきたのはサスケ達と同じ位ラブラブしちたいというものだった。なるべく構う様にしよつ。

ついで、ミカゲが凄いことになってるな。さっきまで、感動で涙目になっていたのに、婚約者宣言から田をハイライトにして、射殺さんばかりにサスケの嫁 - sを見てる。あれは、ヤバイな。

取り敢えず、俺はこの後に起こるだろう悲劇（喜劇）を傍観することにしよう。……これでようやく原作開始か。どうしようかな~？

第三話（後書き）

とうとうわけで、どうでしたでしょうか？今回は難産で、手こりやつました。

なかなかネタが思いつかなく、やはり、有名な白い悪魔ネタを使つことになつてしましました。

こんな私の作品を今回も読んで頂きありがとうございます。

今後も頑張つて執筆していくつと愚こます。

志保

By

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2936m/>

2人の転生者 ナルト side

2011年2月6日17時25分発行